

新富町文化財調査報告書 第17集

県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴Ⅱ期地区・北田工区）  
に伴う埋蔵文化財発堀調査概要報告書

KITA DA  
**北田地区遺跡**

国指定史跡新田原古墳群確認調査に伴う調査概要報告書

NYU TA BARU  
**新田原47号墳**  
**新田原62・63号墳**  
**新田原48号墳**

1995.3

宮崎県新富町教育委員会



北田地区遺跡（西側から日向灘を望む）

## 序

本年度は青森県三内丸山遺跡や長崎県壱岐の原の辻遺跡など新聞・テレビなどを賑わす考古学上のニュースがあり、よりいっそうの文化財に対する関心が高まりつつあります。

新富町教育委員会でも、北田地区において圃場整備事業にともなう発掘調査と昨年に引き続き国指定新田原古墳群確認調査を実施しました。

北田地区遺跡では古墳時代から律令期にいたる集落が確認され、沖積地における数少ない集落についての調査であり、新田原古墳群では完形に近く復元できるほどの円筒埴輪とともに周溝が確認され、古墳の墳丘以外の調査でも多くの資料を蓄積することができました。

これらの調査の成果をこれまで空白だった歴史の一部分を埋める学術研究資料の一つとして広く活用していただければ幸いです。

北田地区遺跡の調査に際しましては、宮崎県一ヶ瀬土地改良事務所および一ヶ瀬川土地改良区など工事関係の皆さんや地元有志の皆さんのご協力のもと調査をすすめることができました。また新田原古墳群の墳丘測量調査では昨年同様宮崎大学考古学研究室の皆さんにご協力をいただきました。

ここに心からお礼を申し上げます。

平成7年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁雄

## 例　　言

1. 本書は、北田地区県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、平成6年度に実施した北田地区遺跡、また史跡新田原古墳群確認調査に伴う新田原47号墳、新田原62・63号墳の周溝確認調査、および新田原48号墳測量調査の報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

ア：調査主体 新富町教育委員会

教　育　長	清　郁　雄
社会教育課　課　　長	水間　亮
タ　　課長補佐	齊藤　久明
タ　　副主幹	山崎　和子　(庶務担当)
タ　　主　　査	有田　辰美　(調査・事務担当)
タ　　嘱　　託	有馬　義人　(調査担当)
調査補助員	井田　篤・黒木誠也・笠瀬明宏

イ：調査指導・協力 宮崎大学助教授

九　州　大　学　助　手	西　健一郎　(　タ　)
長　崎　大　学　助　教　授	長岡　信治　(　タ　)
櫻原市考古学研究所	吉村　和昭　(　タ　)
宮崎県教育庁文化課	菅付　和樹　(調整担当)
宮崎大学考古学研究室	林田　和人・南　陽子・山崎　亜実
	長友　あゆみ・川野　清・吉田　佳代
	湯浅　民子・久綱　和美

ウ：調査に従事された皆さん

荒木春美、杉尾美千子、野尻富子、林田百合子、岩下ヨシ子、日野君代、  
太田信子、金丸アキエ、大木恒男、長谷川博久、斧山正一、高山覚、長友寅、  
倉永武明、倉永増夫、齊田道雄、齊田貞雄、税田潤、塩月義也、高山富貴子、  
黒木啓子、金丸初江、倉永玲子、齊田嘉子、長友シズ子、川村ヨシ子、  
河野隆子、清品子、倉永美恵、河野和夫、黒木市郎、戸上芳高、野口義広、  
桧垣芳孝、井崎節、児玉武年ほか

3. 本報告で用いる方位はすべて磁北である。

本書の執筆・編集は有田・有馬がおこなった。

## 本文目次

### 第1章 北田地区遺跡

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査にいたる経緯	1
3. 調査の概要	4
4. 古墳時代から律令期の堅穴住居址	6～9
5. まとめ	9

### 第2章 新田原47号墳

1. 調査の概要	17
2. 遺構と遺物	17
3. まとめ	22

### 第3章 新田原62・63号墳

1. 調査の概要	23
2. 遺構と遺物	23
3. まとめ	25～28

### 第4章 新田原48号墳

1. 調査の概要	29
2. 墳丘の計測値	29
3. まとめ	29

## 図 版 目 次

第1図 北田地区遺跡位置図 (25000分の1) .....	2
第2図 北田地区遺跡遺構図 (1000分の1) .....	5
第3図 北田E地区 SA1埋甕・カマド断面図 .....	6
第4図 北田E地区 SA1堅穴住居址実測図 (80分の1) .....	7
第5図 北田E地区 SA1遺物実測図 (3分の1) .....	8
第6図 新田原古墳群位置図 (6000分の1) .....	18
第7図 47-4トレンチ実測図 (40分の1) .....	19
第8図 新田原47号墳トレンチ設定図 (400分の1) .....	20・21
第9図 47-4トレンチ出土埴輪実測図 .....	22
第10図 新田原62・63号墳トレンチ設定図 (400分の1) .....	24
第11図 63-2トレンチ出土円筒埴輪実測図 (8分の1) .....	25
第12図 63-2トレンチ実測図 (50分の1) .....	26・27
第13図 新田原48号墳墳丘測量図 (800分の1) .....	30・31

## 写 真 図 版

口絵	北田地区遺跡遠景（西側から望む）	
図版1	北田地区遺跡調査前遠景（東側から）	10
図版2	北田地区遺跡E地区全景	10
図版3	北田E地区不明土坑土器出土状態	11
図版4	北田E地区自然流水路？	11
図版5	北田E地区SA1住居址	12
図版6	北田E地区SA1遺物出土状態	12
図版7	北田E地区SA1 2号・3号埋甕	13
図版8	北田E地区SA1 1号カマド	13
図版9	北田E地区SA1出土土師器	14
図版10	北田E地区SA1出土須恵器	14
図版11	北田A地区SA13住居址	15
図版12	北田A地区SA13 カマド	15
図版13	北田A地区遺構検出状態	16
図版14	調査に従事された皆さん	16
図版15	新田原58号墳周辺	32
図版16	63-2トレンチ（62号墳方向をみる）	32
図版17	62号墳周溝埴輪出土状態	33
図版18	新田原62号墳出土円筒埴輪	33
図版19	新田原48号墳全景	34
図版20	新田原48号墳墳丘測量調査風景	34
図版21	地中レーダー調査風景	35

# 第1章 北田地区遺跡

## 1. 遺跡の位置と環境（第1図参照）

新富町は、宮崎県の中央部北を占める児湯郡に属し、西に西都市、北に高鍋町、南に一ツ瀬川を界し、宮崎郡佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む。県都宮崎市より主要交通動脈となっている国道10号・地方幹線鉄道JR日豊本線を北に約20kmと比較的交通の便に恵まれ、気候は温暖である。町域は一ツ瀬川左岸の主に水田やハウス園芸に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に占められている。この洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦地に顯著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面(海拔約120m)、三財原面(海拔約90m)、新田原面(海拔約70m)の三つにわけられる。

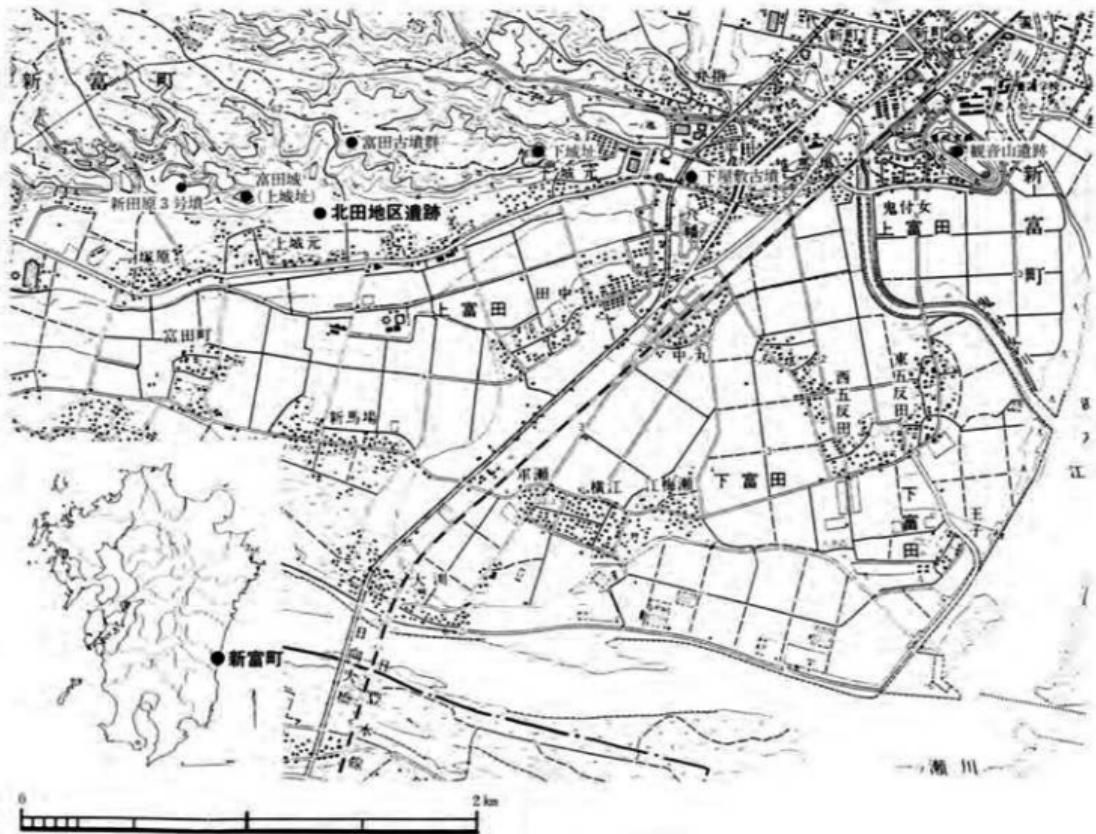
北田地区遺跡は背後に新田原台地をかかえ、前面に一ツ瀬川が形成する沖積低地を見渡す河岸段丘上にある。近接する遺跡として新田原台地縁辺部には六世紀後半の円墳で構成される富田古墳群が点在する。弥生時代末から古墳時代初頭の下屋敷古墳や觀音山遺跡が一ツ瀬川河口を臨むかたちで分布している。また、当地は中世においては富田郷の中心地とおもわれ、後背台地の東側先端部には下城址(古富田城)が、西側に近接する台地には富田城(上城址)があり、その間には城下集落を示す「上屋敷」「下屋敷」の字名が残る。

## 2. 調査にいたる経緯

一ツ瀬川土地改良区により推進されている圃場整備事業で、上城元の北田地区において地元住民の承諾がえられ、早期の圃場整備着工の強い要望があった。県文化課と新富町社会教育課では協議し、5月23日から6月3日にわたって県文化課により当地区遺跡の範囲確認などのため試掘調査を行われた。調査の結果、弥生時代から古墳時代そして中世にいたる遺物などが検出され、遺跡は広範囲にわたることが判明し、6月16日概要報告をおこなっている。その後、数度にわたる協議を経て現地のハウス栽培の期日が迫ってこともあり、新富町教育委員会で発掘調査をすることになった。

8月9日には調査にあたって協議がひらかれ、関係業者の工事着工とビニールハウス用地の早期調査などを確認し、8月10日には調査を開始している。

圃場整備工区の総面積は約12万m<sup>2</sup>で土の切り盛りにより削平される工区のみを調査対称地とした。発掘調査面積は約1万m<sup>2</sup>である。調査区はA~E地区に分割して呼称し、それぞれ単独で遺構、遺物を取り扱う(第2図参照)。現地の調査期間は1995年8月10日から開始し同年12月14日に終了した。



第1図 北田地区遺跡立地図 (1/25000)

## 北田地区遺跡 調査及び協議の日程

- 1994年 8月 9日 現場打ち合わせ  
※ビニールハウス用地の早期調査で了解する。
- 8月10日 現場調査開始
- 8月18日 現場協議  
※ 10日～22日までの間はA地区、C地区、D地区などを暫時造構確認したため、一箇所に集中した調査はおこなっていない。
- 8月23日 B地区 表土剥ぎ調査開始（ハウス建設用地）
- 9月 7日 現場協議
- 9月 9日 B地区 調査終了
- 9月10日 C地区 調査開始 (ハウス建設用地)
- 9月15日 C地区 調査終了
- 9月16日 E地区 調査開始
- 10月15日 E地区 東側 450m<sup>2</sup>分終了  
※ 工区の都合上、一部終了し工事に明け渡す。
- 10月24日 現場協議
- 10月25日 D地区 調査開始  
※ E地区と平行して表土をはぎ、造構確認をする。
- 10月27日 町文化財審議委員会 現地調査
- 11月 4日 航空写真撮影  
※ E地区を中心撮影
- 11月 7日 宮崎日日新聞紙上に掲載
- 11月30日 E地区 調査終了
- 12月 1日 A地区 調査開始
- 12月 8日 D地区を航空写真測量実施
- 12月12日 D地区 調査終了
- 12月14日 A地区 調査終了

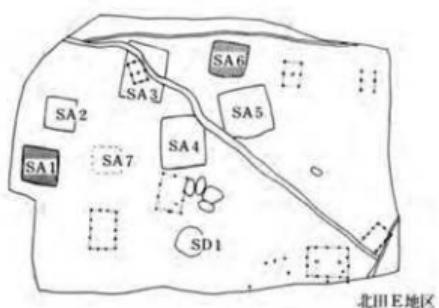
### 3. 調査の概要

北田地区遺跡は調査区をA～E地区の5つの工区にわけて調査した。以下に各地区的遺構とについてまとめる

北田地区遺跡 遺構一覧表

地区名	時代	遺構	調査面積
A地区	弥生時代	竪穴住居址（15軒↑）	
	古墳時代	竪穴住居址（1軒）	
	中世	溝状遺構（1条） 土坑（1基）	約1000m <sup>2</sup>
B地区	弥生時代	竪穴住居址（2軒↑） 土器散布地（1）	約750m <sup>2</sup>
C地区	古墳時代	竪穴住居址（4軒） 掘立柱建物（2軒）	約1000m <sup>2</sup>
D地区	弥生時代	土器散布地（1↑）	
	古墳時代	竪穴住居址（10軒） 掘立柱建物（8軒↑）	
		不明土坑（4基） 溝状遺構（3条）	
			約3400m <sup>2</sup>
E地区	弥生時代	土器散布地（1↑）	
	古墳時代	竪穴住居址（7軒） 掘立柱建物（9軒）	
		不明土坑（6基） 溝状遺構（3条）	約3600m <sup>2</sup>

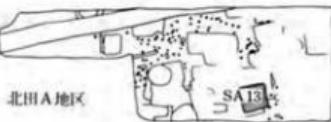
※ （↑）はそれ以上の可能性があるもの



北田E地区



□ は埋甕をもつ住居地  
■ は埋甕とカマドをもつ住居地  
■ はカマドをもつ住居地



北田A地区

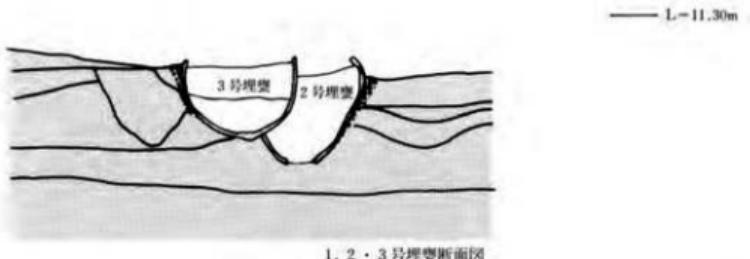
0 50m

第2図 北田地区遺跡遺構図 (1/1000)

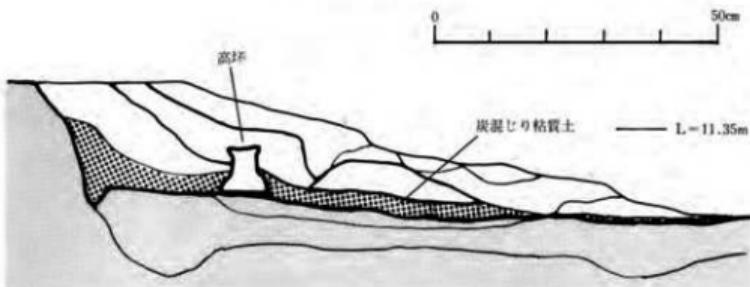
#### 4. 古墳時代から律令期の竪穴住居址

北田地区遺跡の内容については整理の途中であるため、代表的な住居址について紹介しほかの住居址と比較することにより全体を概観したい。なお、今回は古墳時代の遺構について言及する。

北田地区遺跡では総数22軒の古墳時代後期から律令期にいたる竪穴住居址が確認されている。図4は北田E地区のSA1竪穴住居址の平面図と土層断面図である。SA1は四本柱で、東西6.2×南北6.4の規模をもつ方形住居址である。中心よりやや南側にいわゆる「埋甕」をもつ。この住居址では総数三基の埋甕があり、特に3号埋甕は2号埋甕を破壊してつくりつけられている(図3-1)。住居址の東側にはカマドがあり(1号カマド)、竈内は支脚として高坏を利用した一つ掛けのカマドである(図3-2)。また住居址の北辺には熱をうけ変色した箇所があり、あるいは1号カマドに前後するカマドの痕跡であるかもしれない。

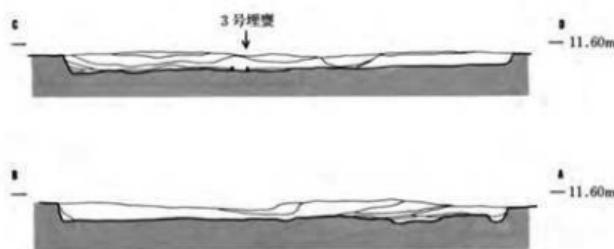
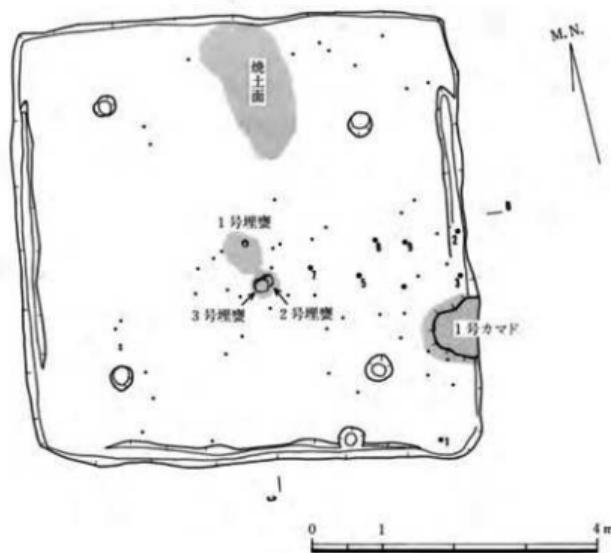


1. 2・3号埋甕断面図

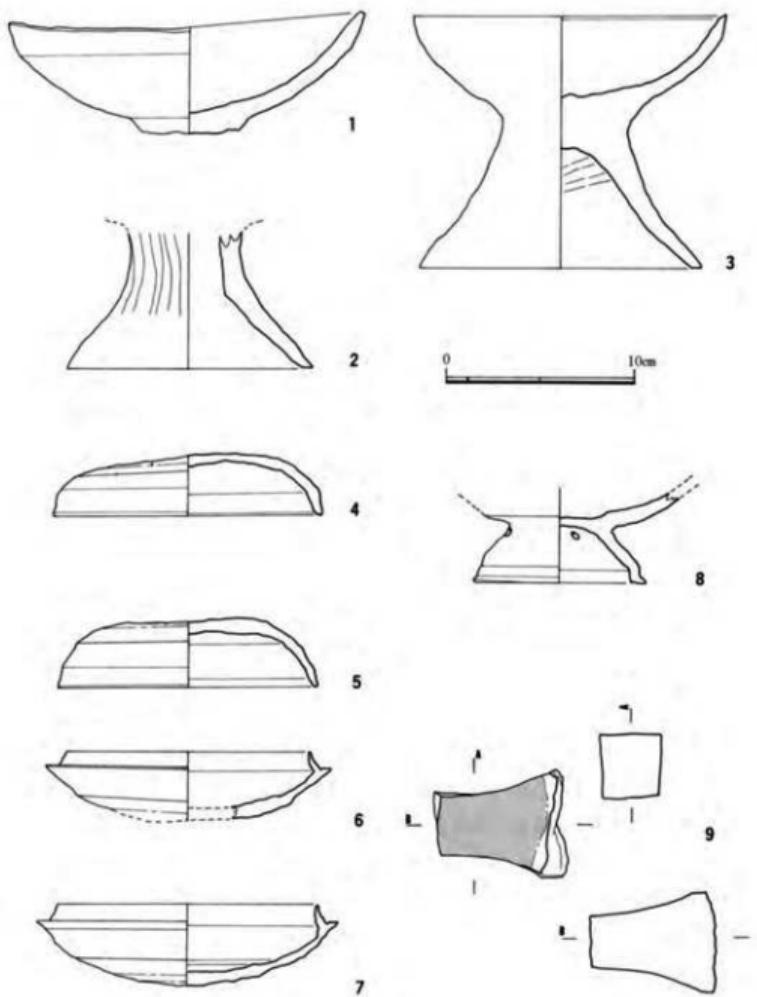


2. 1号カマド断面図

第3図 北田E地区 SA1住居址 埋甕・竈断面図



第4図 北田E地区 SA1 竪穴住居址実測図



第5図 北田E地区 SA1住居址 遺物実測図 (1/3)

遺物としては図5にしめしたものがあるが、須恵器のうち坏身などからT K43型式に平行する時期に相当し、実年代で六世紀後半の年代観がえられる。

埋甕とカマドの供伴については特筆すべきことである。埋甕はそれ以前の炉から派生したそれと同等する施設だとされ、宮崎平野を中心に確認されている。六世紀代になってあらわれる施設であるが、その機能がはたして単に炉のみであるかは定かではない。また日向地方においてはこれまでのところカマドの検出が七世紀とされており、今回の調査で六世紀後半にまでさかのぼることは必至である。また埋甕とカマドの供伴はその機能について考察するうえで興味深いものであり、今回の調査ではカマドが多用される七世紀前半の住居址では埋甕は設置されない。しかし、一部A地区のS A13住居址ではT K217型式の須恵器の坏蓋にともなって埋甕とカマドが確認されており、この時期での埋甕の消滅を断定はできない。図2はA・D・E地区の造構図であるが、埋甕をもつ住居址、埋甕とカマドをもつ住居址、カマドをもつ住居址の別で竪穴住居址を分類している。なお、E地区のS A1とS A6住居址ではカマドの煙出しが壁を突き出しておらず、ほかの住居址のカマドとの構造的、時期的な差異をあらわしている。

## 5.まとめ

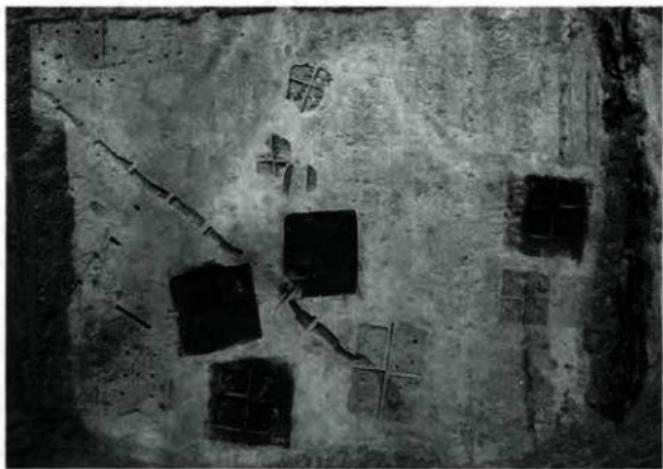
北田地区遺跡は弥生時代後半と古墳時代後半を主体とする集落遺跡である。弥生時代の造構としては調査の日程の制約もありつかみきれなかった。しかし今回報告できないがE地区などでみられた自然流水路？かとおもわれる土層の変化（図版4）は将来的に水田造構などの検出が予想される。また、A地区などでは土師皿が表採されており、中世の柱穴造構などもあったようだ。

古墳時代ではカマドを設置した住居址がまとまって確認されたことなど、日向地方の古墳時代から律令期の集落構造を検討するうえで重要な資料である。今後カマドと埋甕の機能の問題を考慮した遺物、造構の検討を進めていきたい。

異常ともおもえる猛暑のなかの調査であり、粘土や砂質土でしめられる調査区での作業は困難をきたした。早期完了をめざした作業のなかで発掘調査中の協議や調査体制の整備など問題が山積した調査であったが、今後これらの問題点を十分検討し反省したい。



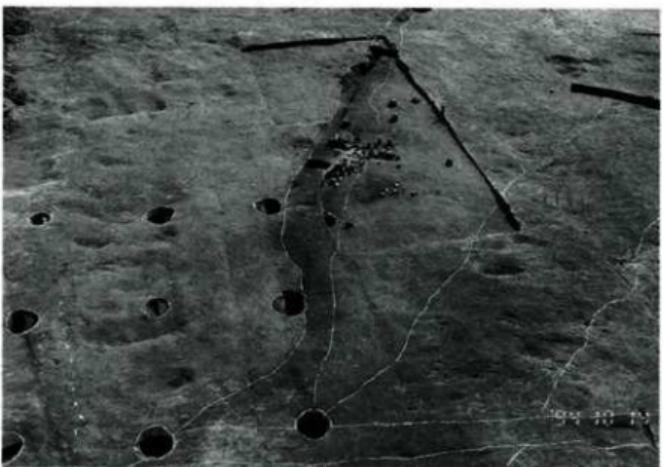
図版1 北田遺跡調査前遠景（東側から）



図版2 北田EC地区掘立柱建物



图版3 北田E地区不明土坑遗物出土状態



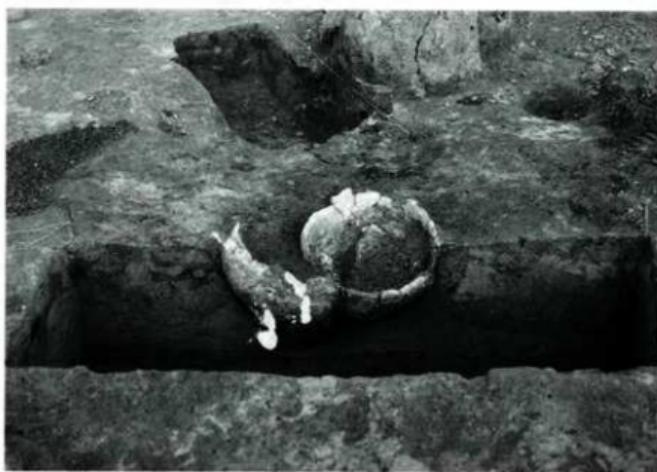
图版4 北田E地区自然流水路？



図版5 北田E地区 SA1竪穴住居址（北から）



図版6 北田E地区 SA1遺物出土状態



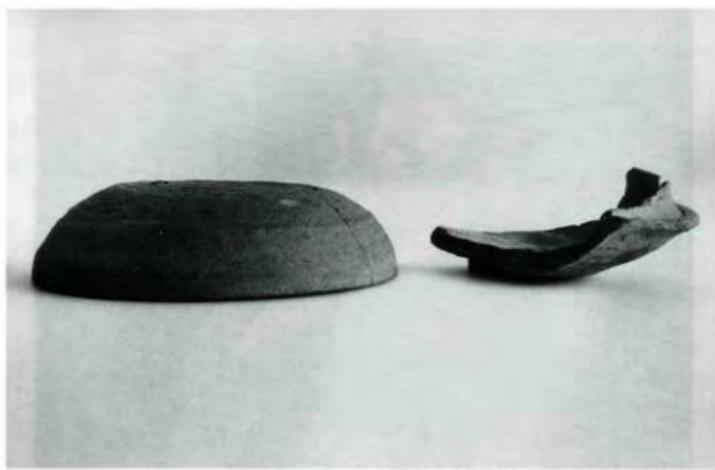
図版7 北田E地区 SA1 2・3号埋甕



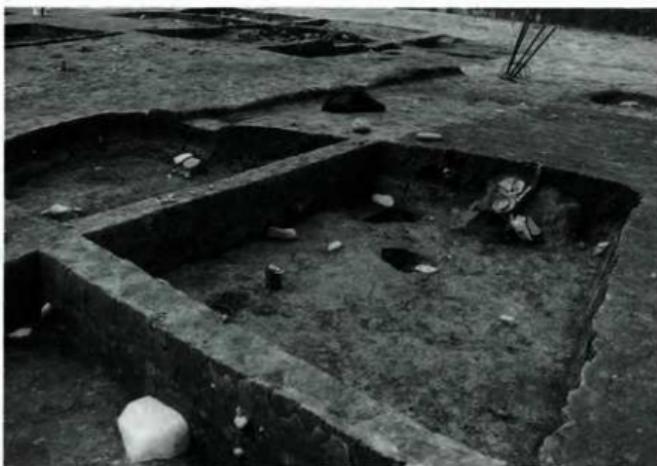
図版8 北田E地区 SA1 カマド



図版9 北田E地区 SA 1出土土師器



図版10 北田E地区 SA 1出土須恵器



図版11 北田A地区 SA13



図版12 北田A地区 SA13 カマド



図版13 北田A地区 遺構検出状態



図版14 調査に従事された皆さん

## 第2章 新田原47号墳

### 1. 調査の概要

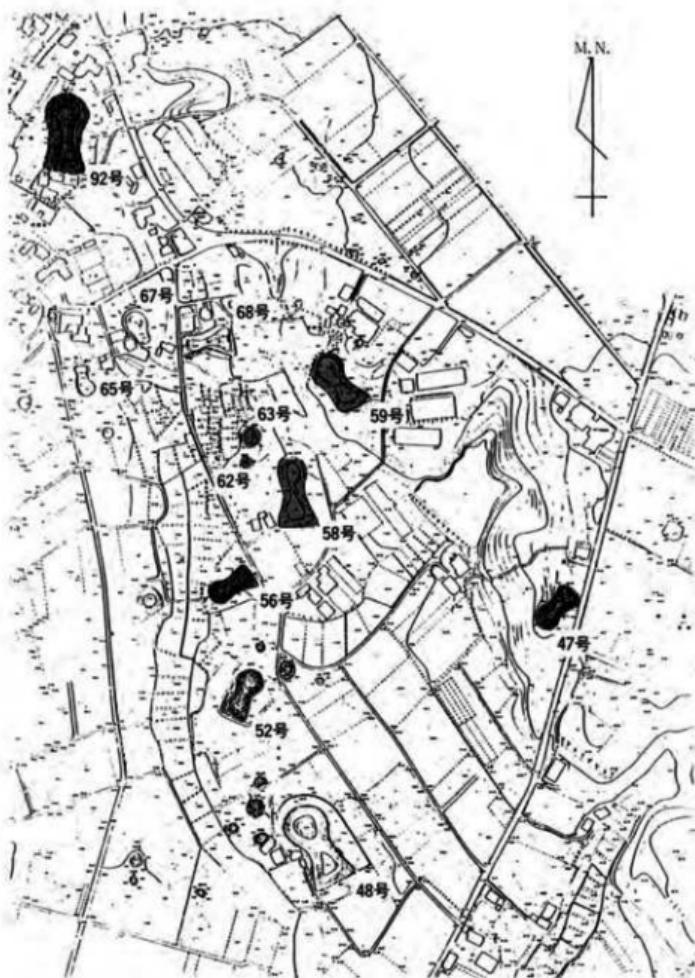
新田原47号墳は新田原台地より一段高い段丘面にあり、祇園原支群に点在する前方後円墳の中でも59号墳とともに高位置に所在する（図6）。過去における調査歴はないが、地元古老によると、昭和六年の盗掘が記憶されており、現在墳頂部にはその痕跡がある。また埴輪の破片なども多く散布している。

調査は図7に示すように、墳丘の南側のくびれ部に一本（2トレンチ）、後円部に四本（3・4・5・6トレンチ）、前方部の南側に一本（1トレンチ）、同じく北側に一本（7トレンチ）と任意にトレンチを設定し、予想される周溝と墳丘の裾部などの確認をおこなった。日程は1994年5月から6月のなかで実施した。

### 2. 遺構と遺物

調査の結果、いずれのトレンチでも葺石は検出されず、墳丘は盛土成形のみとおもわれる。とくに4トレンチでは（図8）盛土といえる土層が確認され、後円部前面に多くの土の堆積があったことがうかがえる。さらに墳丘には裾部から周溝にいたる部分にテラスがあり、それから浅い周溝が墳丘に沿うかたちでめぐる。残念ながら、4・5トレンチにおいては周溝は確認されなかったが、古墳自体が傾斜地に造営されているためではないだろうか。

遺物については2・7トレンチにおいて集石遺構かとおもわれる焼石が検出されているが、基本的には古墳造営以前の遺物はない。また須恵器の破片も微小で年代を推定できる個体はない。形象埴輪では7トレンチで動物（馬・猪？）の足とおもわれる個体があり、そのほかは円筒埴輪である。円筒埴輪は復元できるもので六条のタガをもち、復元器高約64センチ、底部径約20センチ、口縁部径約40センチを測る。外面調整は一次調整タテハケのみで、最下段タガに断続ナデをもつ個体もある。黒斑はなく、焼成は堅緻なものと軟弱ものがある（図9）。

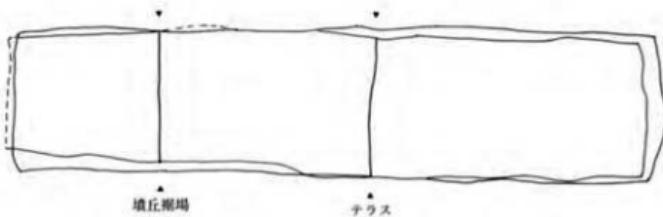
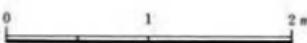
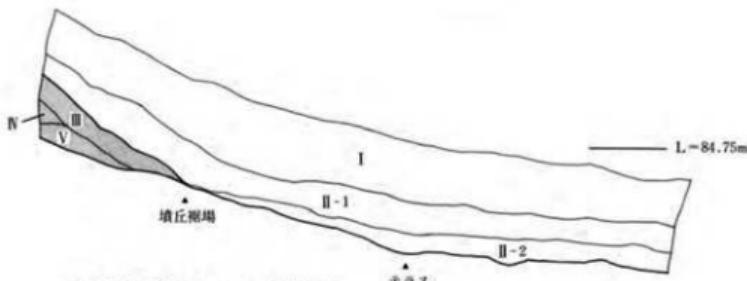


※ ■ は埴輪が確認されている古墳

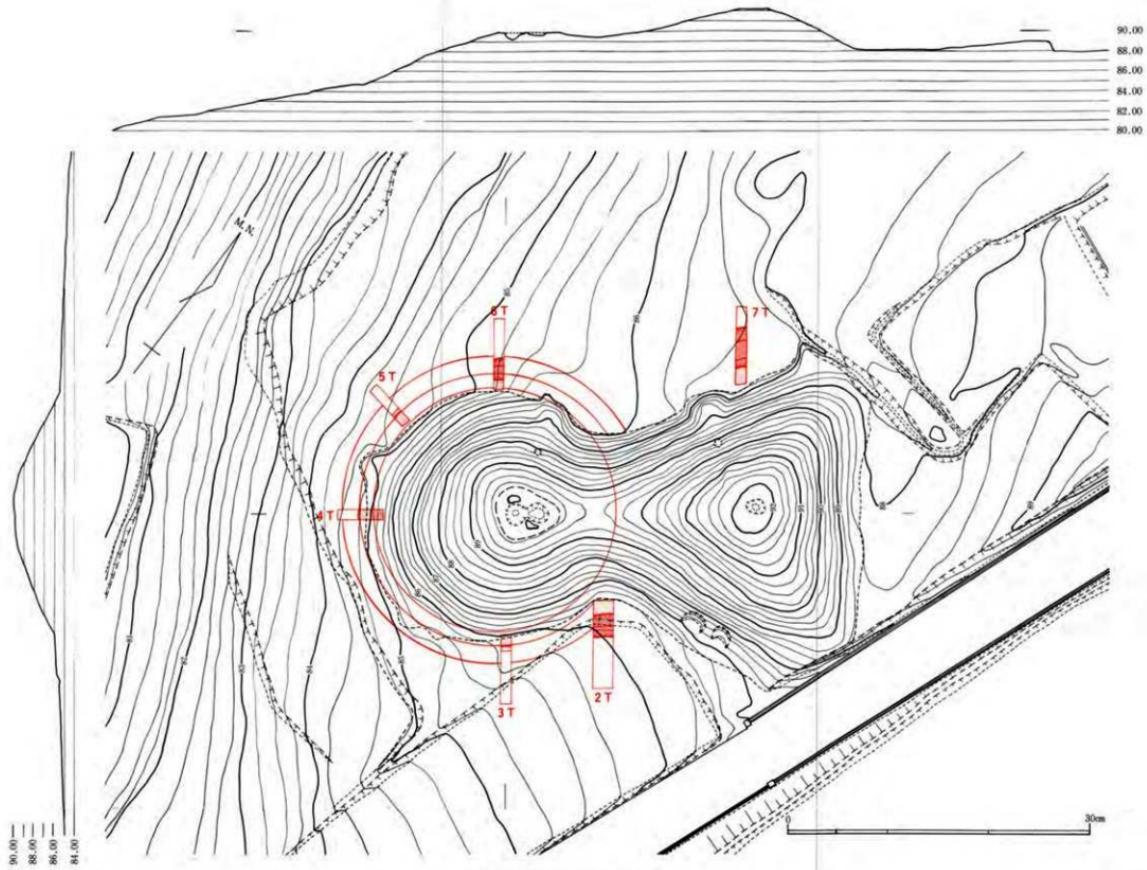
0 300m

第6図 新田原古墳群位置図 (1/6000)

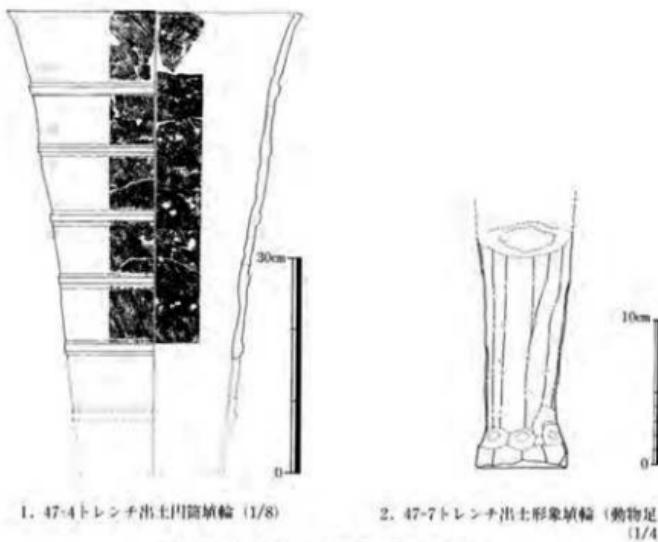
I	表土	
II-1	黒色土	(遺物混入・埋土)
II-2	黒灰色土	
III	オレンジブロック混入黒色土	
IV	アカホヤブロック土	
V	漆黒色土	盛土か?



第7図 47-4 トレンチ実測図 (1/40)



第8図 47号トレンチ設定図



第9図 47号トレンチ出土遺物実測図

### 3.まとめ

新田原47号墳出土の須恵器では型式を考察することはできない。円筒埴輪は断続ナデ技法などから川西編年V期のなかでも新式で六世紀の中頃から後半に属する。新田原古墳群の他の古墳で採用された埴輪の形態の分類で比較すると断続ナデと外面調整の簡素化など当古墳群における最終段階の埴輪とかんがえることができる。また墳丘の裾部にあるテラスとそれに沿うかたちでめぐる周溝は今後さらに複数のトレンチによる確認が必要で、とくに前方部前端など判明しない点を今後の調査で解明したい。

## 第3章 新田原62・63号墳

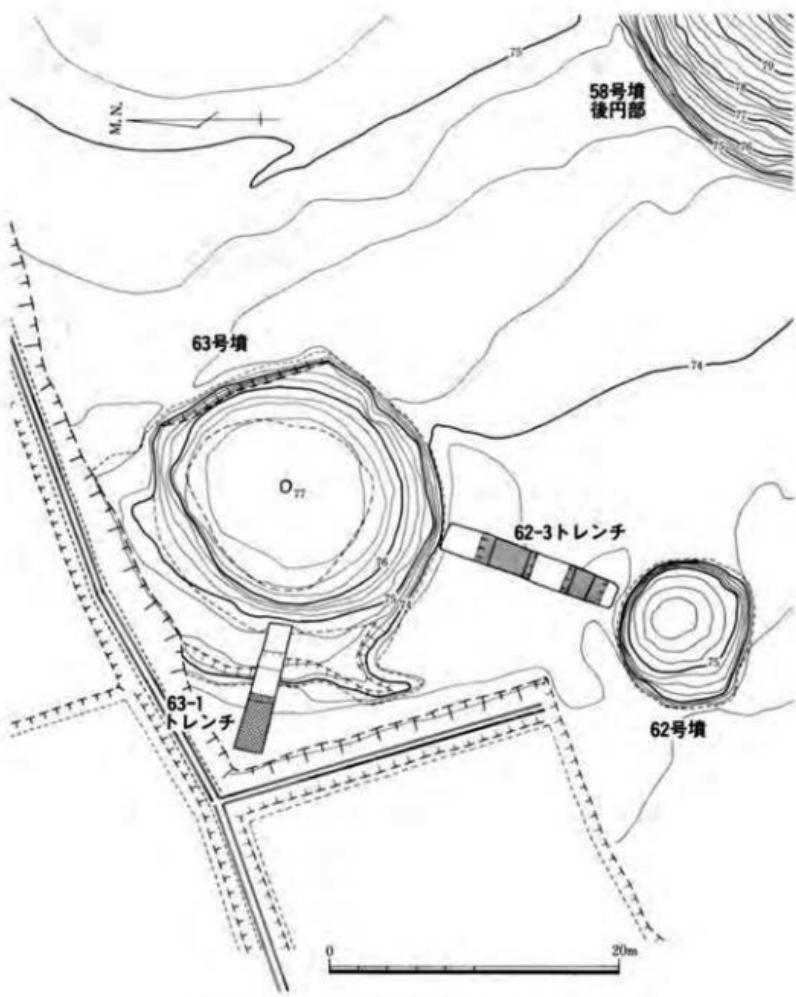
### 1. 調査の概要

新田原62・63号墳は新田原58号墳（百足塚）<sup>むかでづか</sup>に近接している円墳でそれぞれ現状で約20メートル、約10メートルの規模がある。百足塚は墳長約80メートルの前方後円墳で盾形の周溝をもつが、北東部が明瞭に残るのに対し西および南側では明確ではない（図6）。この周溝を復元して反転すると、62・63号両墳は周溝のライン上に配置したかたちになる。今回の調査の目的は62・63号墳の周溝の有無を確認することにあり、あわせて百足塚との二つの円墳との関係を考察することでもある。

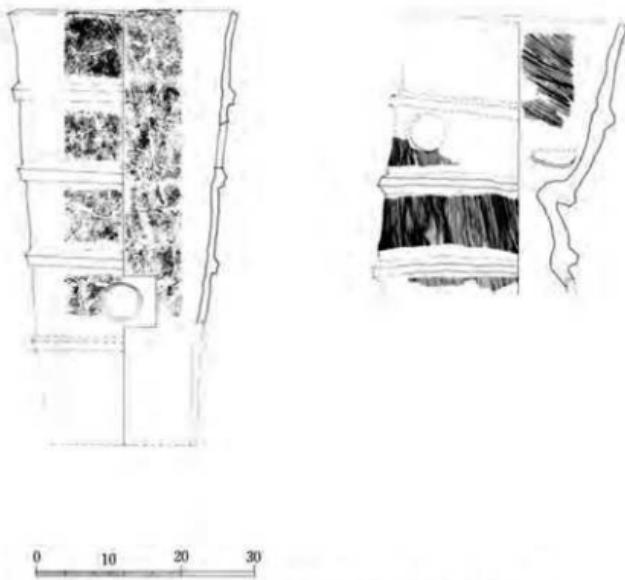
### 2. 遺構と遺物

トレンチは62号墳と63号墳との間に両墳の裾まで幅2メートル、長さ13.6メートルで設定し（63-2トレンチ）、63号墳の西側水田にむけて幅2メートルで設定した（63-1トレンチ）（図10）。当初、両墳とも埴輪などの遺物が周辺に散布しているため、周溝がほどなくして検出されるだろうと予想していたが、63-2トレンチ（図11）では63号墳側で表土から約40センチは均等に耕作されており、1.6メートルで周溝底部が検出された（63号墳の周溝：幅約4メートル、深さ約1メートル）。また、同様のトレンチで62号墳側では周溝から多くの埴輪片と少々の須恵器片が検出された（62号墳の周溝：幅2.6～2.8メートル、深さ約0.5メートル）。63-1トレンチは境界で指定されている範囲外からトレンチを設定したが、墳丘測量図と現地観察から二段目テラスを想定することが妥当とおもわれた。このような予測のとおり63-1トレンチは盛土とおもわれる土層は確認することができたのだが、周溝は以前の圃場整備などで消滅したようで、検出できなかった。同じく、墳丘の北側は相当の範囲を側溝で削平されているとおもわれる。

遺物については62号墳の周溝から出土した多くの埴輪片は少なくとも四～五個体の円筒埴輪であり、そのうち二個体までが復元できた（図12）。図12-1は須恵質の窯窯焼成であり、焼成時の熱をうけて湾曲している。図12-2は土師質であり口縁部外面にヘラ記号をもつ。いずれも一次調整タテハケのみで、透孔は丸形である。また図12-2はタガが三条まで復元できているが、百足塚で検出された円筒埴輪の底部が径約20センチであることと、三条目のタガの下に透孔があることを考慮すれば、タガは四条あり、口縁部径約30センチ、底部径約20センチ、器高約60センチの復元案がえられる。図12-1についても湾曲しているが同様のスケールをもった埴輪が想定される。須恵器はTK43型式の壺身などが採集されているが、時期を特定できない。



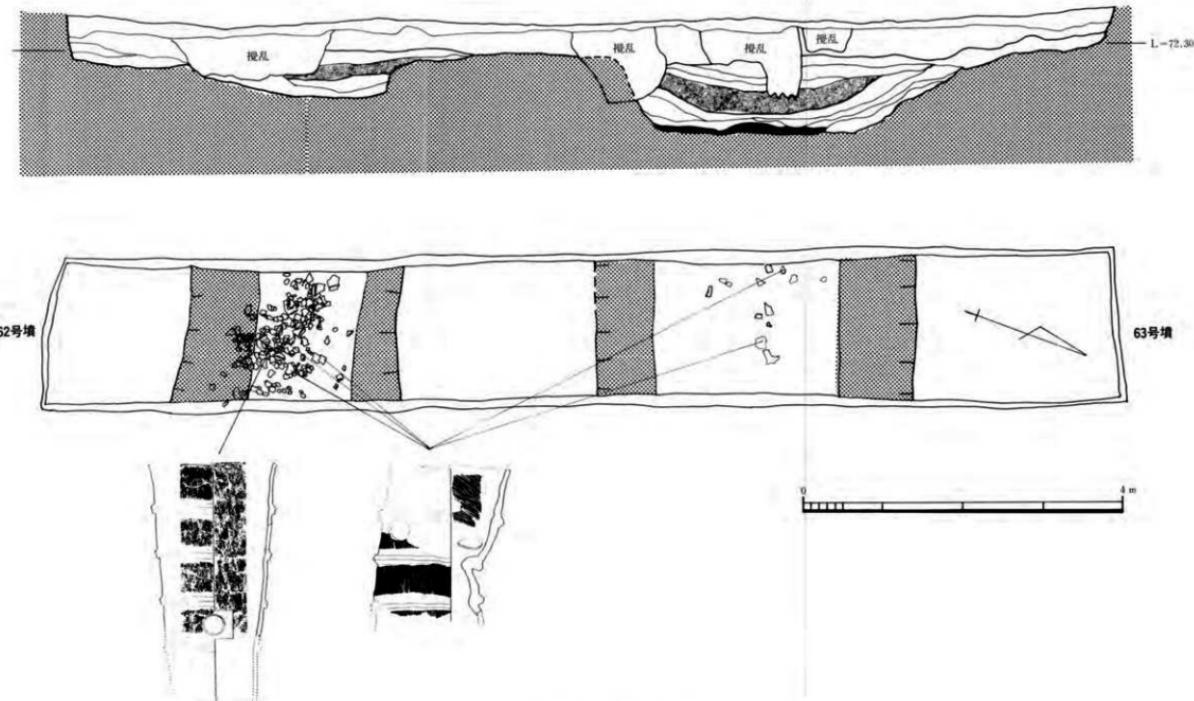
第10図 新田原62・63号墳 トレンチ設定図 (1/400)



第11図 63-2トレンチ出土円筒埴輪実測図 (1/8)

### 3.まとめ

新田原63号墳は63-1で検出された段落ちが墳丘の裾であるとすれば、墳径約30メートルで二段築成の円墳であり、幅約4メートルの周溝がめぐる。新田原62号墳は幅約2.5～3メートルの周溝がめぐることが予想されるが、墳径についてはさらなる調査が必要である。それぞれの古墳の時期については、62号墳は周溝に倒落した円筒埴輪が58号墳のそれと同様の特徴をもっているため、これに近い時期がえられ、六世紀前半の年代を考慮しておきたい。63号墳については今回の調査で、(1) 63-2トレンチの63号墳の周溝から出土した埴輪片が62号墳周溝出土の円筒埴輪に接合したこと、(2) 63-1トレンチではついに埴輪片は一片も採集されなかったこと、などで63号墳では埴輪は採用されなかつたことが確認できる。しかし、時期や前後関係などは不明である。



第12図 63-2トレーニチ実測図 (1/50)

今回の調査では部分的な調査でもあり全体まで特定しえなかつたが、今後遺構の復元を含めた史跡の整備のためには重要な地区もあるため、継続した調査をすすめていきたい。

## 第4章 新田原48号墳

### 1. 調査の概要

新田原48号墳（弥吾郎塚）は祇園原支群でも最大の規模をもつ前方後円墳である。盾形周溝をもち周辺に四基の円墳がある。過去の調査歴などではなく、近接する円墳から遺物が表採できるものの本墳からは遺物などは表採されていない。今回はこの前方後円墳と周辺の円墳について墳丘に繁茂する竹・木の伐採もあわせて墳丘測量を実施した。日程は八月上旬に前方後円墳の墳丘を、三月下旬に周辺の円墳などを補足し測量した。なお測量の基準設定は古墳の周囲は非常に見渡しがよく、後円部中心を原点とし主軸を指向した簡易のトラバースを組んだ。図面は200分の1スケールで実施し対称面積は4万2000m<sup>2</sup>である。

### 2. 墳丘の計測値（図13）

墳丘測量の結果、新田原48号墳は墳長約94メートル、後円部径約52メートル、前方部幅約54メートルの規模をもち、後円部と前方部の比高差は1.75メートルで後円部が高い。周溝は現状で最大2.5メートルの深さをもち、西側と南側にいくにしたがって消えていく。墳丘自体で特質すべきことはくびれ部の西側に大きく陥没したような窪みがあり、さらに後円部は北西方向に肥大したようになっている。

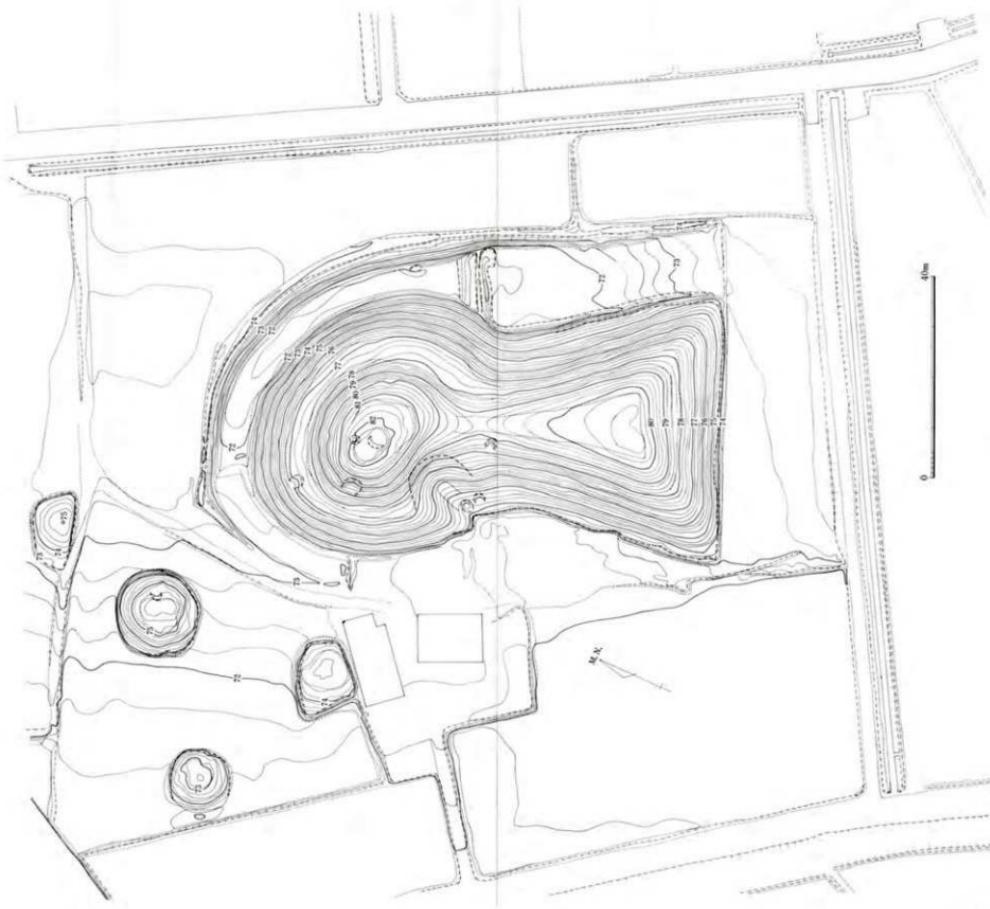
### 3. まとめ

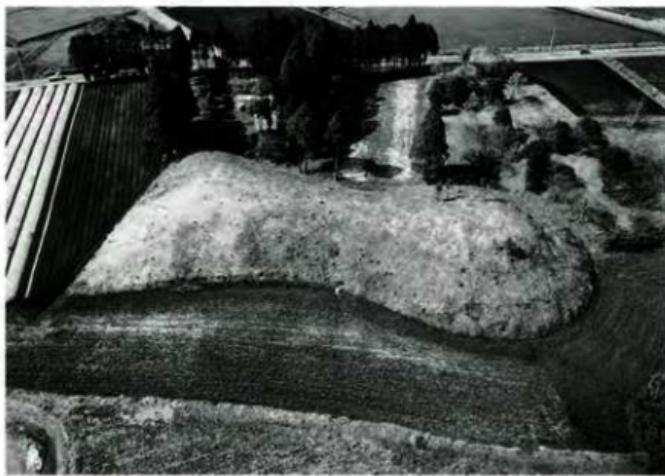
後円部の平坦面が狭いことと、くびれ部にむけて陥没したかのような落ち込みがあることから横穴式石室の存在がうかがわれる。実際、戦前に大石を持ち運びだしたとの伝承があるが、ここでは可能性に止め今後の調査に期したい。

遺物などは全く表採されていないため、年代などについては考察しにくい。祇園原支群の多くの前方後円墳が埴輪を採用しており、当古墳群の前方後円墳で埴輪をもっていない古墳は時期的に埴輪採用以前か以後であると仮定すれば、横穴式石室をもつとおもわれる弥吾郎塚は最後の前方後円墳である可能性が高い。とすればこの時期の日向地方でも最大の前方後円墳であり、祇園原古墳群の首長権の最盛期にあたるのではないだろうか。

なお、平成七年度10月実施の両墳頂部の主体部の主体部探査を目的に「地中レーダー」及び「電気探査」を実施している（図版）が明確な主体部を特定することはできなかった。これには調査時の異常渇水の影響も考慮する必要があると思われ、平常時のデータの採取を目的に再検討の機会をもちたい。本探査についてはマイアミ大学地球物理学応用考古学研究所中島研究室のディーングッドマン氏に委託し、奈良国立文化財研究所の西村康氏の御協力を頂いている。

第13図 新田原45号墳測量図 (1/500)





図版15 新田原58号墳周辺



図版16 63-2トレンチ (62号墳方向を見る)



图版17 62号墳周溝埴輪出土状態



图版18 新田原62号墳出土円筒埴輪



图版19 新田原48号墳全景



图版20 新田原48号墳墳丘測量調査風景



図版21 地中レーダー調査風景

## 報告書抄録

フリガナ	キタダ ナク イセキ ニュウタバル ゴウフン ニュウタバル ゴウフン ニュウタバル ゴウフン
書名	北田地区遺跡 新田原47号墳 新田原62, 63号墳 新田原48号墳
副書名	農村基盤総合整備バイロット事業（尾鈴2期地区北田工区）に伴う埋蔵文化財確認調査概要報告書 史跡新田原古墳群確認調査概要報告書
卷次	
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	有田辰美 有馬義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	〒889-14 宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491
発行年	1995年3月31日

フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積	調査原因
北田地区遺跡	新富町大字上富田	47 3013		8月10日～ 12月14日	10000 m <sup>2</sup>	圃場整備事業
新田原47号墳 新田原62, 63号墳 新田原48号墳	新富町大字新田	47 1001		5月1日～ 8月12日	120 m <sup>2</sup>	整備のための 確認調査墳丘 測量
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項	
北田地区遺跡	集落	弥生・古墳	堅穴住居 掘立柱建物	土師器、須恵器、石製品、 鉄器	古墳時代のカマド	
新田原古墳群	古墳	古 墳	古墳周溝	円筒埴輪、須恵器、土師器	国指定史跡	

新富町文化財調査報告書 第17号

県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴Ⅱ期地区 北田工区）  
に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

北田地区遺跡

新田原47号墳

新田原62・63号墳

新田原48号墳

発行年月日 1995年3月

発 行 宮崎県新富町教育委員会

印 刷 (有)印刷センタークロダ